

# 「ガネフォ」第1回大会の思い出

ガネフォ水球

桑原和司

(成城大学出身)

ガネフォとは「新興国競技大会」の事で、英語の The Games of the New Emerging Forces の略称 (GANEF0) である。東京オリンピック開催の1年前の1963年11月に行われた、この第1回大会に「水球の日本代表選手として出てくれないか？」と大学のOBから声がかかった。

当時、私は25歳。銀行の水泳部に所属し、インターバンクの競泳大会等には出場していたものの、水球からは少し遠ざかっていたかと思う。しかし、まだ自分が必要とされる場所があるのなら、ぜひとも！と思い、2つ返事で参加を決めた。

そこからの準備期間はあっという間に過ぎた。予防接種を受け、日本代表チームの団結式に参加し、11月2日にインドネシア行きのガネフォ専用機に搭乗した。一緒に向かった日本水球チームのメンバーは、ほとんどが社会人で勤務先は様々だったが、その年の夏の競泳大会等で見知った顔ばかり。皆「日本代表としてのプレッシャー」など全く感じていない様子で、「海外に行ける！」と嬉々としていた。今思うと、同年代の仲間が集まり、あたかも修学旅行に行くような気分だったのかもしれない。

インドネシアのジャカルタ空港に到着すると大勢の人々が集まり、歓迎ムード。日本からやってきた我々にも、若い女の子たちがキャーキャー騒いで、

ちょっとしたスター気分を味わった。みんな照れくさくてニヤニヤしていたように記憶している。

選手村に滞在し、毎晩反省会という名の宴会。(原則として飲酒はNGだったが、こっそり飲むならよし、と言われていた。)  
「あのパスはよかった」だの、「あの動きはまずかった」だの水球練習の成果を言い合ったが、毎日本当に楽しく充実していた。試合中の自分の活躍や失敗は、今でも昨日のこのように記憶している。

日本チームはベスト4まで勝ち残り、最後は4チームの総当り戦。アルジェリアとアルゼンチンには勝ったものの、インドネシアチームに負けて「銀メダル」に終わった。

大会後の園遊会では、スカルノ大統領と直接話す機会があった。内容は「インドネシアはどうですか?」と言ったよもやま話だったが、この経験が私のその後の人生を大きく変えたといっても過言ではない。この時、大統領と普通に意思の疎通はできたのだが、もっとスムーズにコミュニケーションが取れれば、更に自分の世界が広がるはずだと思った。そこで、英語の必要性を痛感したのだ。

帰国後はとにかく毎日、英語の勉強に邁進した。その結果、銀行勤務中は常に海外関連の仕事を任せられ、ロス・アンジェルズやシアトルにも赴任した。ガネフォに出場したのが最後の水球の試合。そういう意味では我が青春時代をしめくくった、忘れられない大会だ。



スカルノ大統領と語る桑原和司（私）